

troop. In *Contemporary Primatology*, S. Kondo, M. Kawai and A. Ehara (eds.), Karger, Basel. pp. 423-427

学 会 発 表

- 1) 幸島に生息するニホンザルの排泄寄生線虫卵の季節的変動ならびに駆虫試験について

堀井洋一郎・森 明雄

第20回プリマテス研究会(1967)

ニホンザル研究林

ニホンザル研究林施設設置の準備段階として、特別事業(下北)によって下記の調査研究および折衝が行われた。

1. 長野営林局と話し合い、上信越地方における研究林予定地について相互の了解に達した。

2. 下北半島: 1) 主として食痕、糞内容と直接観察から、年間の食物の季節変化と採食行動の資料を集積記録した(和田久他との共同研究2年計画の第1年)。2) これまで知られた約60地点の泊り場について林分構造、植生のなかでの位置・地形的特性の調査を進めるため、初年度として調査記録の検討をおこなった(森治他との共同研究)。3) ブナ・ヒバ林の択伐的施業と更新の過程を永久クオドラート(40×40 m²)を設けて追跡調査した。択伐天然更新の造林技術的解析と、それにともなっておこる森林植生のサルの生息環境としての変化の予測を行なうことを目的としている。4) 冬期12月~3月(63日間)にわたって、M群の遊動の連続追跡をおこなった。積雪期の土地利用、遊動の性質、遊動生活への気象積雪状態の影響、冬期の泊り場のえらばれ方など遊動と環境構造、遊動と群れ社会の関係を考える上で、基本的なデータがえられた。なお、これまでの調査で、M群については、森林の林分構造と過去の施業のあり方が、遊動ルートと泊り場の選択に与える影響をある程度まで明らかにした。これは、今後、ニホンザル個体群の生活維持と森林施業のあるべき姿、とを考えると重要な知見である。

3. 屋久島: 1) 集中調査(第3次)、1975年7月16~8月15日(31日)にわたり、12名(増井憲一、福田史夫、田中晋、小倉進一、斉藤、桜井道夫、菅牧子、渡辺邦夫、J. Burton、丸橋珠樹、足沢貞成、東滋)による共同調査をおこなった。目的としたのは、研究林予定地を中心とする地域個体群の現状と動態を、継続的につかむことであった。(a)永田一瀬切間の西部林道ぞい、国割岳斜面の国有林(下屋久営林署1~6林班: 研究林予定地)、(b)それに隣接する民有林、(c)国割岳西北稜(上屋久営林署)を対象に調査した。全域について群れの分布、群れ

の大きさをおさえた。A、Bの4群については、性・年齢構成・遊動・群間関係・遊動時のグルーピングなどについてくわしい調査がなされた。

以上は、増井憲一他との共同利用研究計画と研究林特別事業とを中心にして、企画実行された。2) 丸橋珠樹がK、O群について、6月、10月、12月、2~3月の通年の生態学的調査をおこない、自然群のhabituationのもとに、遊動と土地利用の季節変化の研究をおこなった。

報 告 そ の 他

足 沢 貞 成

- 1) 畑に被害をおよぼすサルの対策について

一青森県下北群脇野沢村九艘泊の群れを例に—
〔雑誌にほんざる I, 1974〕

- 2) 北限にて思う〔モンキー No. 143 1975〕

- 3) 下北のニホンザル

一冬の遊動生活と森林の変貌—(I)
〔モンキー No. 144 1975〕

- 4) 下北のニホンザル

一冬の遊動生活と森林の変貌—(II)
〔モンキー No. 145 1975〕

大学院学生

昭和50年度における京都大学大学院理学研究科動物学専攻霊長類学分科の学生、指導教官および研究テーマはつぎのとおりである。

氏名	学年	指導教官	研 究 テ ー マ
佐藤 俊	D 2	河合雅雄	ケニア北部に住むレンディ ー族の遊牧生活に関する 研究
渡辺邦夫	D 2	川村俊蔵	シシバナザルの社会行動
B・S・ グレワル	D 1	河合雅雄	ニホンザルにおける活動様 式と社会関係の量的研究
栗石邦義	D 1	川村俊蔵	モズの社会行動
菅原和孝	D 1	河合雅雄	ニホンザル自群然における 青年期オスの成長にともな う社会関係の変遷に関する 社会学的研究
J・ブル トン	D 1	川村俊蔵	ニホンザルの Clustering に関する比較行動学的研究
松村道一	D 1	久保田競	霊長類の随意運動の制御に おけるシナプス機構の分析
十川和博	M 2	高橋健治	霊長類の組織タンパク質の 分解機作の研究
浜田生馬	M 2	久保田競	霊長類行動発現機構の神経 生理学的研究

丸橋珠樹 M1 河合雅雄 垂直分布に基づいたニホンザル自然群の生態学的研究
森山昭彦 M1 高橋健治 霊長類のタンパク質分解酵素の性状の研究

所内談話会

昭和50年度には、所内談話会は7回開催された。本年度も49年度に引き続き毎月第2、第4水曜に行なわれた。以下に演者とその概要を記す。

第37回 5月28日 竹中 修

「血液の話」

演者は、血液の有する諸機能、1. 酵素、二酸化炭素、熱、情報、栄養物等の輸送、2. 抗体、補体、血液凝固等の生体防御について概説し、次いで現在の研究テーマである霊長類ヘモグロビンの構造と性質、ニホンザル新生児期における血液タンパク質の動態について研究成果を報告した。

第38回 6月10日 杉山 幸丸

「ニホンザルの生涯」

演者は、ニホンザルが一生を通じてたどる行動軌跡を人口学的資料の分析と事例報告を比較しながら、雄、雌それぞれについて紹介した。

第39回 6月25日 庄武 孝義

「生物集団中に潜在する有害遺伝子について」

演者は、生物集団中に潜在する有害遺伝子（遺伝的負荷）の量を、各種の動物で推定した資料を示し、これが生物集団の維持と密接な関係がある事を紹介した。

第40回 7月10日 目片 文夫

海外帰朝報告「大動脈平滑筋における電氣的ひろがり」

演者は、神経末端の直接の支配を受けていない内層の大動脈平滑筋は、どのような方法で神経の命令に反応しているかを調べる為、動脈の外層と内層の間、及び動脈の輪状方向の電氣的連絡を調べ、外層平滑筋の電氣的興奮が、活動電位の伝播によっても電氣的緊張電位の流れによっても内層平滑筋を刺激する事を示した。

第41回 9月17日 田中 二郎

海外帰朝報告

演者は、昭和49年7月18日より昭和50年7月17日までの1カ年間、特別事業費によるアフリカ調査を行なった。

調査は、タンガニヤ西部のチンパンジー、ボツワナのブッシュマン、ザイール東部のバンブティ・ビグミー、ケニア北部のラクダ遊牧民レンディールを対象に行なわれ、その経過と成果の一端をスライド及び8mm映画を中心に報告した。

第42回 10月29日 大島 清

「サル分娩と周産期の卵管、子宮活動」

演者は、サル分娩の前後に於ての子宮、卵管の活動を筋電図及び内圧の両面から連続的に記録し、自発パターンも、プロスタグランディンに対する反応性も、分娩前、中、後によって著しく異なる事を観察し、分娩現象を境界とした内分泌環境の激変が予測される事を示した。

第43回 11月26日 岡田 守彦

「ヒトとサルの二足歩行」

演者は、サル類とヒトのバイベダリズムの類似と相異及びサル類の間の類似と相異について主として生機構学的側面から紹介し、その適応的意義について考察した。

(文責 林 基治・景山 節)

海外との交流

1) アマゾン上流域における広鼻猿類の調査

西邨顕達・渡辺 毅

出張期間 西邨：50年7月—51年3月

渡辺：50年10月—51年3月

出張先 コロンビア

私たちは、日本モンキーセンター第3次学術調査隊に加わり、調査を行なった。両名とも第2次隊（48年度）からの継続参加である。隊の構成は、代表者が伊沢紘生（日本モンキーセンター）で、私たちの他に水野昭憲（石川県庁・白山自然保護センター）が加わり、現地ではコロンビア国立大の J. Idrobo 教授と、INDERENA の Carlos Cruz 博士が共同研究に参加した。

西邨は前回の調査地と同じ Caquetá 河の支流である Peneya 川に6カ月間滞在し、ウーリーモンキーの生態学的・社会学的調査を行なった。前回の経験から現地での生活と調査に十分なれたこととサル自身が私たちになれたことが相俟ってかなり成果があがった。とくにウーリーモンキーの2つの群れで個体識別がすんだことから、個体の行動、個体間関係、群間関係等について新しい知見が得られた。

渡辺は前回につづき広鼻猿各種の分布、形態的変異等の調査を目的として、Peneya 川、Caquetá 河本流、Putumayo 河上流を歩き、観察と資料の収集を行なった。資料の詳しい分析はまだ行っていないが、この地域ではこれまでこの種の調査が殆んど行なわれなかったのていくつかの新しい発見が期待される。この他 Peneya 川の調査地では8mm映画の撮影により、広鼻猿のロコモーションの研究を行なった。（西邨顕達）

2) エチオピアにおけるヒヒ類の種間関係、とくに種間雑種についての比較研究。

河合雅雄（代表者）、岩本光雄、庄武孝義、森梅代、